

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530823

研究課題名(和文) 比較文化的視点から見た日本人青年のアイデンティティ形成

研究課題名(英文) A cross-cultural understanding of identity formation in Japanese adolescents

研究代表者

杉村 和美 (SUGIMURA, Kazumi)

広島大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：20249288

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本人青年のアイデンティティ形成の特質を明らかにすることであった。18-30歳の日本の青年を、ヨーロッパ、中東、アジアの青年と比較した。その結果、日本の青年におけるアイデンティティの形成は、欧米の青年と同様に自己の独自性を明確にする作業であると同時に、他者との関係性の維持についても配慮する作業である；文化的自己観、精神的健康との関係から見て、少なくとも18-25歳については、日本の大学生と社会人の間で、アイデンティティの特徴に大きな違いはない；日本の青年はヨーロッパの青年よりアイデンティティの模索を長期間行っており、アイデンティティが不安定であることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The present study aimed at unraveling the feature of identity formation in Japanese adolescents and emerging adults. For this purpose, we compared and contrasted the scores of identity processes and other relevant indices in Japanese adolescents and emerging adults (18-30 years old) with those in European, Middle Eastern, and Asian counterparts. The results indicated that (1) while Japanese adolescents and emerging adults had developmental needs to express one's own uniqueness, they were also directed to form a sense of identity emphasizing the maintenance of harmonious relationships with others; (2) the patterns of relationships among identity, self-construction, and well-being were found to be similar between university students and young workers in Japan; and (3) Japanese adolescents and emerging adults, as well as Taiwanese and Chinese counterparts, were characterized by identity instability, compared with European adolescents and emerging adults.

研究分野：発達心理学

キーワード：アイデンティティ 青年期 文化 相互独立性 相互協調性 精神的健康

1. 研究開始当初の背景

(1) アイデンティティの形成は、青年期の発達における中心的な課題である。発達心理学の分野では過去 50 年間にわたり、アイデンティティ形成・発達に関する多くの研究が蓄積されてきた。しかし、日本で得られたアイデンティティ研究の知見を海外の研究者との知的共同体に持ち込もうとすると、様々な問題が浮かび上がる。例えば、日本人青年にとって重要なアイデンティティの領域は何であり、どのような形成プロセスをたどり、集団主義あるいは相互協調的とされる文化的価値観と個人の感覚であるアイデンティティをどのように共存させているのかといった問題である。この背景には、わが国のアイデンティティ研究が、独自の問いや測度をもって展開されてきたうえに、海外の研究の中に知見を位置づけてこなかったことがある。そのため、日本人青年のアイデンティティ形成が比較文化的に見てどのような位置づけにあるのかが分からないという、基本的な問題が残されたままになっている。この問題が残されたままでは、国内でいくら知見を積み上げても、その意味や意義を海外と共通のベースで評価することができない。そこで本研究では、日本人青年のアイデンティティ形成の特質を、比較文化的な視点から明らかにすることとした。

(2) 研究代表者はこれまで、アイデンティティ探求に見られる自他の視点の協応のあり方(「関係性」の観点)から、アイデンティティ形成のプロセスとメカニズムに関する研究を展開してきた。これらの研究は、文化を問わずアイデンティティ発達の根底にある共通の特質を明らかにするものであった。しかし、それにも関わらず、得られた知見のいくつかには、日本の文化的文脈に見られる自己や社会性の発達の特質が反映されている可能性があった。また、研究代表者が行った米国と日本の青年のアイデンティティ形成を比較した研究によれば、アイデンティティ形成のゴールは米国の青年と共通であるが、日本の青年に特有の、他者(親)との一体感を土台にした自律性の獲得という道筋のあることが示唆された。このような成果は得られているものの、申請者のこれまでの研究は独自の視点と測度を用いているために、日本人青年のアイデンティティ形成の独自性を海外と共通の土壌で十分に明らかにできていない。このたび、欧米やアジアで幅広く用いられ始めた共通のアイデンティティの測度を用いた研究の機会と、この測度を用いて研究を開始した複数の国のアイデンティティ研究者のコミュニティへの参加が可能となったので、本研究を申請した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近年多くの国で急速に普及しているアイデンティティの測度を用い

て日本人青年のアイデンティティ形成の特徴を検討するとともに、得られた知見を諸外国の青年と直接的・間接的に比較して日本人青年の特質を明らかにすることであった。具体的には以下の2点を検討した。

(1) 研究1: オランダで開発され海外で広く用いられ始めた Utrecht-Management of Identity Commitments Scale (U-MICS) の日本版を作成し、この測度を用いて日本人青年のアイデンティティ形成の特徴を検討する。

研究1-1: 大学生について検討する。

研究1-2: 働く若者(社会人)について検討する。

(2) 研究2: 得られた知見を諸外国の知見と比較する。

研究2-1: 同時期に共同でデータ収集を行うイタリアの青年群(大学生・社会人)との直接的な比較検討を行う。

研究2-2: 時期を異にして収集される(された)諸外国(西欧・東欧諸国, 南米諸国, 米国, 中国など)の青年群(大学生)と間接的な比較検討を行う。

3. 研究の方法

(1) 研究1

予備調査: 質問項目の邦訳とバックトランスレーションの手続きを経た後に、日本版 U-MICS (教育領域・対人関係領域) の因子構造の検討、信頼性および妥当性の確立のための質問紙調査を実施した。調査対象者は、日本の大学生 435 名(平均年齢 20.04 歳)であった。妥当性の検討においては、原版の開発時(Crocetti et al., 2008) とほぼ同じ指標(自己概念の明確さ、性格特性、親子関係)を用いた。

研究1-1: 日本の大学生 605 名(平均年齢 20.71 歳)を対象に、アイデンティティ(U-MICS: 教育領域・対人関係領域)、文化的自己観(相互協調性・相互独立性)、自尊感情、人生満足感、成人形成期(emerging adulthood)の意識を測定する質問紙調査を実施した。調査対象者の学部や年齢構成は、同時期に調査を実施するイタリアの大学生と合わせた。

研究1-2: 日本の社会人 354 名(平均年齢 24.47 歳)を対象に、大学生と同様にアイデンティティ(U-MICS: 仕事領域・対人関係領域)、文化的自己観(相互協調性・相互独立性)、自尊感情、人生満足感、成人形成期(emerging adulthood)の意識を測定する質問紙調査を実施した。調査対象者の職種や年齢構成は、同時期に調査を実施するイタリアの社会人と合わせた。

(2) 研究2

研究2-1a: アイデンティティ(U-MICS: 教育/仕事領域・対人関係領域)、文化的自己観(相互協調性・相互独立性)、自尊感情、人

生満足感の関連を検討した。分析対象者は、研究1で収集した日本のデータのうち、18-25歳の大学生588名および社会人199名であった。

研究2-1b：成人形成期（emerging adulthood）の意識について、日本とイタリアの青年の比較検討を行った。分析対象者は、研究1で収集したデータのうち、18-30歳の日本の大学生・社会人959名、イタリアの大学生・社会人1,513名であった。

研究2-2：アイデンティティ形成に関する10カ国の比較検討を行った。分析対象者は、研究1で収集した日本とイタリアの大学生に加えて、ヨーロッパ（オランダ、ポーランド、ポルトガル、ルーマニア、スイス）、中東（トルコ）、アジア（中国、台湾）の18-25歳の大学生合計6,118名（うち日本人557名）であった。用いた尺度はU-MICS（教育領域）であった。

4. 研究成果

(1) 日本版U-MICS(教育領域・対人関係領域)の因子の妥当性と信頼性が確認された。併存的妥当性については、教育領域では概ね確認された一方で、対人関係領域では問題が残った。原因を究明したところ、選択した他者によって諸変数との関連が異なり、母親を選択した者では理論的に妥当な結果が得られたが、それ以外を選択した者ではそのような結果が得られないことが分かった。これを踏まえ以後の研究では、対人関係領域の結果の解釈を慎重に行うこととした。

(2) 日本人青年（大学生・社会人）のアイデンティティ、文化的自己観、精神的健康の関連について、以下の点が明らかになった。

教育/仕事領域のアイデンティティは相互独立性とのみ関連するのに対して、対人関係領域のアイデンティティは相互独立性・相互協調性の両方と関連が見られた。

相互独立性、アイデンティティ（教育/仕事領域・対人関係領域）は、精神的健康と関連が見られた。

大学生と社会人で結果に大きな違いは見られなかった。

以上の結果は、日本人青年は、アイデンティティを形成する際に、自己の独自性を明確にするという発達的な要求を有する一方で、他者との調和的な関係性を維持することに重点を置くアイデンティティを形成することに方向づけられていることを示唆する。

(3) 成人形成期（emerging adulthood）の意識に関するイタリア人青年との比較によって、以下のような日本人青年（大学生・社会人）のアイデンティティ形成の特徴が明らかになった。

日本人青年はイタリア人青年より、18-30歳という人生の時期を、可能性のある時期と認識していた。

各国の中で性差と職業差（学生・社会人）が見られたが、国による差より小さかった。

以上の結果は、日本人青年がイタリア人青年より、人生のこの時期をアイデンティティの模索期であり、社会がそれを容認していると考えていることを示唆する。

(4) 10カ国比較によって、以下のような日本人青年（大学生）のアイデンティティ形成の特徴が明らかになった。

アジア（中国、日本、台湾）の大学生はヨーロッパの大学生より、アイデンティティ（教育領域）のコミットメントの得点が低く、コミットメントの再考の得点が高かった。

この結果は、日本の大学生はヨーロッパの大学生よりアイデンティティが不安定であることを意味する。

(5) 総括すると、本研究の成果は以下の通りである。

日本の青年におけるアイデンティティの形成は、欧米の青年と同様に自己の独自性を明確にする作業であると同時に、他者との関係性の維持についても配慮する作業である。

文化的自己観、精神的健康との関係から見て、少なくとも18-25歳については、日本の大学生と社会人の間で、形成されるアイデンティティの特徴に大きな違いはない。

日本の青年はヨーロッパの青年よりアイデンティティの模索を長期間行っており、アイデンティティが不安定である。

(6) 本研究の成果の国内外での位置づけとインパクトは以下の通りである。

欧米以外の文化圏における青年のアイデンティティ形成がどのようなものであるのか、ほとんど知見がない。本研究の結果は、他国と比較し得る世界共通の指標を用いて、アジア（日本）の知見を提供した世界で初めての研究である。

国内のアイデンティティ研究のほとんどが大学生を対象にしてきた中で、本研究は社会人も対象にして、そのアイデンティティの特徴を明らかにした国内初の研究である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 6件)

1. Sugimura, K., Niwa, T., Takahashi, A., Jinno M., Sugiura, Y., & Crocetti, E. (in press). Cultural self-construction and identity formation in emerging adulthood: A study on Japanese university students and workers. *Journal of Youth Studies*. Doi: 10.1080/13676261.2015.1039964

（査読有）

2. Crocetti, E., Cieciuch, J., Gao, C. H., Klimstra, T., Lin, C. L., Matos, P. M., Morsunbul, U., Negru, O., Sugimura, K., Zimmermann, G., &

Meeus, W. (in press). National and gender measurement invariance of the Utrecht-Management of Identity Commitments Scale (U- MICS): A ten-nation cross-cultural study. *Assessment*. Doi: 10.1177/1073191115584969 (査読有)

3. Crocetti, E., Tagliabue, S., Sugimura, K., Nelson, L. J., Takahashi, A., Niwa, T., Sugiura, Y., & Jinno M. (in press). Perceptions of emerging adulthood: A study with Italian and Japanese university students and young workers. *Emerging Adulthood*. Doi:10.1177/2167696815569848 (査読有)

4. 杉村和美・丹羽智美・高橋 彩 (2014) 働く 20 代のアイデンティティと心理的健康産業ストレス研究, 21, 229-235. (査読有)

5. 畑野 快・杉村和美 (2014) 日本人大学生における日本版アイデンティティ・コミットメント・マネジメント尺度 (Japanese version of the Utrecht-Management of Identity Commitment Scale: U-MICSJ) の因子構造, 信頼性, 併存的妥当性の検討 青年心理学研究, 25, 125-136. (査読有)

6. Arnett, J. J., Zukauskiene, R., & Sugimura, K. (2014). The new life stage of emerging adulthood, ages 18-29: Implications for mental health. *Lancet Psychiatry*, 1, 569-576. DOI: dx.doi.org/10.1016/S2215-0366(14)00080-7 (査読有)

〔学会発表〕(計 7 件)

1. Hatano, K., Sugimura, K., & Takahashi, Y. (4 September, 2014). Is three-dimensional model of identity development useful for Japanese adolescents? Poster presented at the 14th Biennial Conference of the European Association for Research on Adolescence, Izmir, Turkey.

2. 杉村和美 (2014.3.23) 相互独立的自己観の低い日本独自のアイデンティティはあるか 大会委員会企画シンポジウム (溝上慎二企画) 「海外と比較可能な日本の青年期アイデンティティ発達の理解を目指して」 日本発達心理学会第 25 回大会発表論文集, (23), 京都, 京都大学.

3. Crocetti, E., Sugimura, K., Tagliabue, A., Takahashi, A., Niwa, T., Sugiura, U., & Jinno, M. (9 October, 2013). Identity and well-being in university students and young workers: A cross-cultural perspective. M. Syed & E. Crocetti (Chairs), Identity Development in Emerging Adulthood: Exploring the Diversity in Process and Outcomes. Symposium conducted at the 6th Conference on Emerging Adulthood, Chicago, IL, USA.

4. Sugimura, K., Hatano, K., Tokuoka, M., Sato, Y., & Hokii, Y. (8 May, 2013). Identity formation in Japanese emerging adults: From three dimensions to five statuses in the domain of education. Poster presented at the 20th Annual Conference the Society for Research on Identity

Formation, Saint Paul, MN, USA.

5. Sugimura, K., Niwa, T., Takahashi, A., Sugiura, Y., Jinno, M., & Crocetti, E. (30 August, 2012). Identity formation and independent/interdependent self-construal in Japanese emerging adults. E. Crocetti & T. Klimstra (Chairs), Individual, relational, and cultural factors influencing identity paths in adolescence and emerging adulthood. Symposium conducted at the 13th Biennial Conference of the European Association for Research on Adolescence, Island of Spetses, Greece.

6. Crocetti, E., Sugimura, K., Tagliabue, S., Takahashi, A., Niwa, T. Sugiura, Y., & Jinno M. (1 September, 2012). So far so different?: Being emerging adults in Italy and Japan. E. Crocetti & K. Sugimura (Chairs.), Perception of emerging adulthood and transition to adulthood in different cultural contexts. Symposium conducted at the 13th Biennial Conference of the European Association for Research on Adolescence, Island of Spetses, Greece.

7. Crocetti, E., Klimstra, T., Ahmad, I., Ciecuch, J., Gao, C. H., Matos, P. M., Negru, O., Sugimura, K., Zimmermann, G., & Meeus, W. (30 August, 2012). Studying identity cross-culturally: A nine-nation study with adolescents and emerging adults from European and Asian countries. E. Crocetti & T. Klimstra (Chairs), Individual, relational, and cultural factors influencing identity paths in adolescence and emerging adulthood. Symposium conducted at the 13th Biennial Conference of the European Association for Research on Adolescence, Island of Spetses, Greece.

〔図書〕(計 1 件)

1. Sugimura, K. & Mizokami, S. (2012). Personal identity in Japan. In S. J. Schwartz (Ed.), Identity around the world: A global perspective on personal identity issues and challenges (New Directions for Child and Adolescent Development, 138), pp. 123-143. New York: Wiley. DOI: 10.1002/cad.20025

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

杉村 和美 (SUGIMURA KAZUMI)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：20249288

(3) 連携研究者

丹羽 智美 (NIWA TOMOMI)
四天王寺大学・教育学部・講師
研究者番号：50625936

溝上 慎一 (MIZOKAMI SHINICHI)
京都大学・高等教育研究開発推進センタ

一・教授

研究者番号：00283656

(4)研究協力者

Elisabetta Crocetti

ユトレヒト大学・研究員

畑野 快 (HATANO KAI)

大阪府立大学・高等教育開発センター・特
認助教

高橋 彩 (TAKAHASHI AYA)

愛知学院大学・政策科学研究所・研究員

杉浦 祐子 (SUGIURA YUKO)

名古屋大学・発達科学研究科・大学院生

神野 真麻 (JINNO MAASA)

名古屋大学・発達科学研究科・大学院生